あ、あれ？どういうことなの…？え？六魔ノ王？

怪人紳士サノブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あ、あれ？どういうことなの…？え？六魔ノ王？

【Ｎコード】
Ｎ９３２２Ｖ

【作者名】
怪人紳士サノブ

【あらすじ】
いろいろと最低でアホで危ない、どうしょうもないダメ人間が何故か六魔の力を得てネギま！の世界に甦った
今日も今日とて焦土を成し、万物を灰塵に還しながら、もう救いようの無いくらい変態ダメ人間が頑張っていこうとするけどやっぱりこいつはダメかもしれんね
そんなとんでもないお話

注意！
作者の狂った発想がノリと勢いを持って形になったものです
鈍足亀更新どころか忘れられる可能性があり、いい加減な流れで話を進めるので作者も意味不明な話が出ます
それを踏まえた上でお読みください

別にお前生き返らなくて良かったんじゃね？（前書き）

どうも怪人紳士サノブと申すものです

以後お見知りおきを

さて、自分で言うのもアレなんですがこの作品は本当に意味不明です

とりあえず完結の2文字が浮かばない時点でどう物語が進むのか皆目検討もつきません

ネタの中のネタもいい作品なので

こいつは何をいってるんだ！？

と思うところが出ます

更にこの作品の変態主人公はどちらかと言うと外道の類いなので最低な振るまいが受け付けない人は読まないことをおすすめします

それでは1話始まります

別にお前生き返らなくて良かったんじゃね？

「「す、すいましぇんでしゅたっ！！…あぅ……噛んじゃった…」」

「……」

よく子供を庇ってトラックに引かれてオダブツして転生フラグ拾いてぇとか思ったことがある

二次創作でよくある話だし羨ましいと思う

神様にミスって殺されちゃったらそれもフラグ美味しいですフへへとか思うんさ

だがな？実際やられると色々とこう、怒りたくなるんだよ

つまり今俺の目の前に広がる純白の世界に二人の幼女が土下座してるということは、きっとこいつらのせいで俺は死んだと言うわけだ

死んだと分かるのは俺が初めて好きな子に告って相思相愛、恋人同士やっふーと浮かれた帰り道に玉突き事故で突っ込んできたタンクローリー、トラックにコンクリの壁に押し潰されるという…

いや、マジで幸せの絶頂で殺すなよ！？しかもなんなのその殺し方！惨すぎるわ！

「で？怒ってないから、なんで謝ってるのかお兄さんに聞かせてくれるかな？」

「「ひいぃぃぃっ！絶対に怒ってるぅぅぅっ！お兄さんじゃなくて鬼いさんになってるぅぅぅっ！」」

ガクガクブルブルと二人して抱き合いながら怯える幼女達

まぁ死んでしまったのだから仕方ないし、恐らく神であろう幼女二人に青春をぶち壊されたとはいえいつまでも怒るのは大人げない

「なぁ」

「「は、はいぃっ！」」

「飴、食べる？」

「「たべゆー！！」」

飴による餌付けがあっさり通る

いつまでも怯えられるよりはいいんだがな

「で、つかぬことを聞くがお前らは神様とかなんかか？」

「はい、そうですもごもご」

「それでさ　なんとなく理由はわかるがなんで俺がここにいるのか教えてくんない？」

「じ、実は私達が意見の相違で喧嘩し始めたのがきっかけでして」

「その時に誤って、玉突き事故を起こしてしまいました」

なんかもうそれはないよ神様

巻き込みすぎだよ文字通りの大事故だよ

「ちなみに意見の相違ってなにさ？」

「目玉焼きにかけるものが醤油かソースで争ってました」

俺は黙って拳骨を落とした

涙目になっていたがそんなことには俺は動じない

あ、上目遣い可愛いだとか、写メに残したいだとか微塵も思っていない

ちなみに俺は塩で十分だ

その素晴らしさを伝えようとするとボロクソに否定されたので三人して取っ組み合いの喧嘩に

最後は何故かしっぺの応酬になり、皆涙目になった

そして皆して目玉焼きに関しては絶対に相容れないものなのだと感じ、話が脱線しすぎたので三人仲良く正座になって話を戻す

「慌てて二人で事故に巻き込まれた人々の運命を弄って命を救おうとしたんです」

「ですが、どうしても即死したあなたを救うことができませんでした…」

そりゃああんな最期だったんだもん

って即死した人間がふらふら生きてたら怖いわ

いや神だから色々頑張れば出来るのか？だとしたら何故に無理？

「そこは神様パワーで色々弄れば無かった事に出来んじゃないの？」

「それがですね…あなたのいた世界であなたが存在したという歴史まで砕けてしまいまして…やり直しも出来ず、輪廻の輪にも入れません」

「なんてこった…というと俺どうなんの？」

「このままじゃ自然消滅という形になります」

うわぁもう俺ダメじゃん

なんという短い生涯、思いがけない上に理不尽すぎる…

「ですが、なんとか私達であなたを覚醒させるまでに留めることが出来ました」

「留めてどうすんのさ？死に体の俺なんか残したって力の無駄だろうに」

「いえ、貴方をちゃんと輪廻の輪に戻さなければなりません」

「だからあなたには輪廻の輪に戻れるまで直す為に別の世界で生きてもらいます」

「…転生って奴か？」

「輪廻の輪に入っていなければ転生は出来ません　私達があなたを蘇生させて別の世界で生きてもらうのですよ　その世界で生きたあなたの死後に歴史の一部を死ぬ以前の歴史と書き換えるのです」

「輪廻の輪に戻るためには歴史の浄化が必要です　その過程が出来るようになれば転生出来るようになるのです」

つまり消滅しなくなる…

「分かった…俺も完全消滅するよりは、よっぽどいいし、もう一度生きれるならやってくれよ」

「わかりました　生きたい世界は希望がありますか？」

生きたい世界か…

「漫画やアニメの世界ってあり？」

「大丈夫ですよアリです」

「ならばネギまの世界に生きたいです安西先生」

「ネギまの世界ですね？わかりました　あと安西先生じゃありません」

ノリの悪い幼女だな

うぅん結局テンプレの流れだよなこれ…まぁ第2の生を満喫できるならいいや

ネギまの世界はノリで言って見たんだが行けるもんなんだねぇ

まぁ原作に介入しないでゆっくりとその世界を楽しむ心算さ

「そういえば他になにかお願いはありますか？」

「私達にできる範囲なら叶えてあげますよ」

そういやアレってバトルとか色々あんだよな？

だとしたら身を守るために能力が欲しい…

「じゃあここは1つジョジョのスタンドを全部使えるように！」

「え？スタンド？」

「どうしよう…私よく能力とかわかってないよぅ」

「私だってわからないよぅ」

え？なにこれ？まさかスタンドをどういうものか把握してないとか
そんなんなのか？

確かに能力は複雑だし分かりにくいものもあるけれども…なんだか
不穏な空気が

「すみません…私達二人がかりでもその願いは…」

「えぇー…」

「あ、どうしよう！また事故起こしそうになってるようっ！」

おおう

まさか俺の二の舞を踏まないよな？

「えぇいっ！こうなったらあなたの能力を適当にっ！」

「ちょっ！おま」

言葉をいいきる前に足元にぽっかりと大穴が

え？

「後で説明しますので先に行っててください！」

「それではさよならぁ！」

「うおぉぉいっ！この幼女がぁぁっ！！」

そしてそのまま俺は穴に落ちていったのだった

あのいい加減な幼女どもめ…またあの白い空間にいったら何をしてくれてやろうか

そんなことを考えるもすぐに意識は薄れていくのだった

そして気付けば目の前には地面が

「おっぶしゅぁんっ！！」

いやいやいやいやいきなり目の前に地面があったら受け身云々の話じゃないってこれ…

打ち付けて顔についた土を払い、立ち上がる

見渡す限り木、木、木…

回りは鬱蒼とし森の中だった

「（ええっとすみません適当に吐いちゃって）」

「……あぁ、今度そっちにいったらたっぷりいぢめるから気にしてない」

「「（ひぃぃぃぃっ！！）」」

頭に幼女達の声が響いたので普通に応対したつもりなのだがなんでそこまで怯えるのかね？

まぁ、いい

「で、能力について説明してくれよ」

「（は、はぃぃ！それでは能力を自覚させるために勝手に発動させていただきますぅ！）」

まぁ、適当に与えられちゃったわけだから何が使えるか見当もつかんせめて俺はちゃんとよくあるどっか弓兵の固有結界とか死を視る魔眼にしておけばよかったか？

それか、ザ・ワールドとかキラークイーンとか分かりやすくすりゃよかったと？

そんなことを考えていると身体の底から何かが引き出される感覚に見舞われる

身体の回りから赤いオーラみたいなのを出したと思ったら背後になんか現れた

振り向いてみると赤い人型の影が

「こいつは…！」

禍々しいそれはあらゆるものを圧倒する迫力と威圧感を出し、濃厚なまでな死の気配を漂わせる

右手には剣を、左手には銃を異形の形をした得物をそれぞれ携えていた

地獄から這い上がってきた炎のように明滅するそれはさながら魔王のような…

「ってこれ六魔ノ王じゃあねぇか！」

六魔ノ王とは？

それはスタイリッシュ英雄アクションと銘打った日本の戦国時代を元にした某ゲームに出てくる征天魔王の能力だ

元々あり得ないくらいぶっ飛んだ設定と冗談のような世界観から色々と歴史好きには怒られるようなもんなんだが…まぁ、なんというか斬新過ぎて俺はハマっちゃってたんだよなぁ…あぁ懐かしい…じゃなくて！

「なんでこれなんだよ！もうちょっといいのあんだろうが！あれか？俺に巻き舌でぶるるあぁぁとか言えと！？」

「（いやぁ何て言うか）」

「（私達このゲーム好きだったもので）」

「「（ついうっかり…てへっ☆）」」

「ぎ、ぎいぃぃぃっ！！」

なんなんだこの幼女どもはぁぁっ！何がてへっ☆じゃ！どうせ舌とか出してんだろ！

てへぺろか！？てへぺろなんだな！？

あ、ちょっと想像したら、あぁ可愛いかも…

…ってそんなことは置いといてお前らそれでも神か！？そして俺はロリコンじゃないんだからねっ！？

「そもそもなんでスタンドじゃないんだよ…いやこれもある意味スタンドだけど…」

「（それでは大体の能力の使い方と知識を直接頭に流し込みますね）」

「（いきますよぉ！）」

「いや無視かい…っはぁがっ！？」

突然いろんな知識が頭に割りいってくる

ぶっちゃけ痛いんですけど？バ〇ァ〇ンとかの優しさが欲しいくらいに

と、突然知識の奔流が止まった

そして既に頭のなかには事細かに六魔ノ王の扱い方が記憶されている

「（インセクト？）」

「ちゃうわ阿呆めなんでそれは食い付く…しかしいいのかよ？神様（幼女）なのに魔王？なんて与えて」

「（大丈夫です！だって私達神様ですから！）」

「（なんか今馬鹿にされたような気がしたけど…）」

きっと一人はドヤ顔に、もう一人は首をこてんと傾げて？マークを浮かべているに違いない

「まぁともかくだ　知識まで頂戴してくれるのは嬉しい…が」

「「（？？）」」

「……そっちに帰ったらその柔らかそうなモチモチほっぺをお多福になるまでつねり回して遊んでやるから覚悟しやがって下さいね？」

「「（ひ、ひぃぃぃぃっ！！やっぱり鬼いさんだぁぁぁっ！！怖い

よおぉっ！！）」」

うぅん、ヒィヒィ言わせるその日が楽しみだなぁおい

「（あ、あのっ！）」

「ん？俺の下した裁決に意義は認めないかんな？」

「（ひぅっ！じ、実はですねっ？あなたを輪廻に戻すためにかなりの時間の歴史が必要なので不老になってます）」

ほぅ、それはいい

不老不死は嫌だが、不老なら永遠の若さを楽しめる

「（それとあなたの魔力や気も多めにしました）」

「（大体近衛木乃香よりちょっと少ない程度ですかね？）」

「比べようがないからわからんな…まぁいいやありがとう」

サービスといったところか

大量にあっても使い道に関しては自分なりに研究するしかないよな

「（それと最後に…）」

俺の影からこれまた征天魔王が使った剣と銃がぬるりと手元に現れた

首元には体をすっぽり覆ってしまう紅の外套が

そうだよなぁ？魔王の力を使うんだから結局はこれを使うはめになるよな

銃の弾は…魔力とかで代用できんのかね？

それにしても容姿はともかくマジで征天魔王だな俺…

とりあえずネタ的に言ってみるか？

「ふむ……現、デアルカ」

「（似てないです）」

「（これっぽっちも）」

「お前ら……亀甲縛りにして転がされたいみたいだな」

「「（ひ、ひぃぃぃぃっ！！鬼いさんは変態さんでしたぁぁっ！！）」」

「はぁ…ま、とにかくだ　第二の人生堪能してくるよ」

剣と銃を影に否、闇に還して、六魔ノ王を霧散させて俺は歩き出したのだ

こうして俺、扇（おうぎ）　悠天（ゆうま）のセカンドライフはスタートしたのだった

「（あ、すいません）」

「（いい忘れたことが）」

「ああ？なに？」

「（今悠天さんがいる場所は６００年前のヨーロッパです）」

「はぁぁっ！？なんじゃそりゃぁっ！！」

どうやら俺のセカンドライフは谷あり山ありの人生になりそうだ

畜生め

別にお前生き返らなくて良かったんじゃね？（後書き）

やらかした

きっとこれは読まれないぞ！サノブにはその自信がある！

この作品は気が向いたら更新するので次の話がいつになるかわかりません

主人公はロリコンですが、チョメチョメは絶対にしません

て言うか主人公はチキンな部分もあるのでたぶん無理

あってもセクハラ止まり

て言うかセクハラはいっぱいするので作中で主人公逮捕されまくるんだろうなぁ

決して俺はロリコンじゃないんだよ！信じてくれよ！……無理？（前書き）

サブタイが手遅れな気がする２話

決して俺はロリコンじゃないんだよ！信じてくれよ！……無理？

ＳＩＤＥ悠天

「ああ、神様抱き枕にしたい　そして気の済むまでなで回して小さな身体の温もりと鼓動を愛でたい　…だからちょっとこの世界に降りたってよほんまにお兄さんからの儚い願望を叶えるために」

「「（なんてことをいきなり言い出すんですかっ！？そんな儚い願望は粉々に散り潰えてくださいっ！！）」」

蘇生して１００年

人の一生を通り越し、様々な経験をしながら俺は勝手に森の中に家を建てた

いや、もうただただ勢いで頑張ったんですはい

経験って言っても主に家を建てるのに試行錯誤を重ねてたらお陰で１００年過ぎたんだ…俺のアホめ…

話し相手にはいつも神様がいるから飽きない

というか今さらになっておさわりしたかったとか後悔してる

もう一度あの空間に逝くまでに（誤字にあらず）俺は我慢できるかな？

というかいい加減に魔法使ってみたい

神様がおまけにくれた知識で頑張ってみたが…ほとんど建築に時間を費やした俺が簡単に出来るわけなかった

「ダメだ…全然できねえ…」

「（ふぁ、ふぁいとですよぅ悠天さん）」

「（そ、そうですっ！悠天さんには六魔の力があるじゃないですか！）」

ああ、鈴を転がしたような声が心地いい

神様に鼓舞される俺はなんて幸せなんだ

あぁ、真っ白に萌え尽きたぜ…

神様の言う通りに六魔の力があるが実はまだからだに馴染みきってない

て言うか調子にのって破滅ノ焦土を使ってみたがいきなり倒れた

どうやら体力とか魔力とか消費してるみたいだが、使いこなしきれずにいたずらに浪費しただけだ

実際、まったく使えてねぇですはい

宝の持ち腐れって奴だ

とりあえず征天魔王張りの動きぐらいはマスターしようか

実際なんであんな早く剣振れるん？って疑問に思うくらい難しい

銃に至ってはちゃっかり人間離れした身体能力がなかったら左手がもげていた

あのゲームの第六天魔王様マジ魔王様

これが今の限界かぁ等と呑気に思ったり

とにかく死に物狂いで自分を鍛えないとな

魔法は今は二の次よ

しかし、あれだ

意外にも気はそれなりに使えたことには心底驚いた

これも俺の比類なき才能のなせる技よとか言ってみたい

ただし滲み出るは禍々しい赤い気…妖気っていうの？なんかそんなのに変質しているようだ

六魔の力が変質させているようで俺の人間離れしてるのもだいたいこいつのせい

恐らく六魔の力の為に最適な器へと造り変わっているのだと思うて言うか魔法が全然使えないのもこれが原因とか言わないよね？

確かに魔王様は闇属性だったけど、それしか使えなくなってたりして…

とにかく今は俺の人外化が激しいよ

とりあえずそれで人払いの結界を作ってみたが、自分まで払っちゃったりしたときはどうやって帰ろうかガチで困ったぜ

結界をぶっ壊して帰宅したけど反動で森が一部焦土になってたり家が引火しそうになったりてんやわんや

瞬動を発動出来るようになったけどここは瞬動の発動速度と急ブレーキを調整して改造してみた

…速すぎて木に激突したときは鼻が凹みそうになってホントに泣いた

そんな具合に日々鍛練を愚直に続け、ある日気づいた

「あ、トイレとかがねぇ」

「「（ば、馬鹿だぁっ！）」」

いや、雨風を凌げる環境に喜びすぎたんだ

だだっ広い部屋でゴロゴロ転がる毎日

食事？森の熊さんや鹿さんを倒して食って繋いでいます

なんという野生児ライフ

まぁ、まさに部屋しかないんだ

トイレとか全部外で済ましたりしてたからな

今更だがよく１００年も無事でいたな…自分で言うのもなんだがかなりのダメ人間だと自負している

ダメさ加減なら俺はある程度負けない

そんな俺が長い時を生きるために一心不乱に剣を振るい、銃を撃つ

これは今までのダメな俺を返上するチャンスにもなるだろう

…いや、いい加減な家を１００年かけて作ってたら全然ダメじゃん

「（だったら町などに出掛けてみては？）」

「（言語などに関しては六魔に関する知識と一緒に詰め込んだので平気なはずですが）」

「ああ、うんそこはいいんだ……うぅん」

「（どうしました？）」

「……町に可愛い幼女いないかなって」

「（ろ、ロリコンだぁっ！）」

「（ダメだよ！この人を町につれてっちゃダメだよ！）」

「うるせぇっ！俺はロリコンではない！フェミニストあるいは紳士と呼びなさい！」

「（う、うわぁぁっ！絶対にダメな方の紳士だよ！変態と言う名の紳士だよ！）」

「（これはあれだよねっ！お巡りさんに突き出した方がいいよねっ！）」

ふっ…甘いな…小指の甘皮並みに甘い

お巡りさんの一人や二人はなんの障害にならぬわ

というかこの時代にお巡りさんなんてものなくね？

いやあるのかもしれないけど確認したこと無いし、ヨーロッパの方の歴史なんてわからん

そもそもヨーロッパの何処の森に住んでるかわからないさ

はぁ、たまに野盗とかとガチの殺りあいが１００年の間にあったが、皆生きるために無我夢中で殺っちゃったから近くに何があるとかここが何処か聞けばよかった

未熟な俺じゃ交渉に持ち込むなんて出来んしねぇ

それにしても町か…

「やっぱここは行くべきかねぇ町に」

「（う、うわぁ！幼女逃げて！超逃げて！）」

「（危ない鬼いさんが来る前に早くぅっ！）」

「失礼すぎるだろ……まぁ、一人や二人拐かすかもしれんが…」

「「（さ、最悪だぁっ！）」」

その前に家をなんとかしないとな

いつか部屋の家具とかを置いたり書斎を作りたい

だが家具はどうする？金なんて物は俺は持ってない

一文無しは不味いだろ俺…ド貧乏とかそんな話じゃない

熊さんや鹿さんばかり食ってる場合じゃないな…ん？

「ああ、ここにいいのがあるじゃないか」

獣の革を鞣し、肉は干し肉にして売ればいい

……これまた時間がかかりそうだな

だがやってみる価値はあるだろう

下手にここら一帯の動物を狩り尽くさないように注意しながらやらないとな

それと１００年生きて、あ、ウサギって食べれたよね？とか思い出したり川魚を釣ってみたり俺は気付いたらさらに野生児化が著しくなった

だが金と家のリフォームの為、これぐらい我慢さね

そういえば魔法使いとかってもうこの時代にいるんかね？

だとしたら変なのが集まらないようにしないと

あとこの家に野盗とか来すぎだってば

問答無用に命を奪ってくるやつらは人の話を聞きやしない

そういえばエヴァは作中にしたくもない殺人の多くは己を狙う人間などだったな

したくもない殺人ってのは今の俺がまさにそれだ

もう殆ど殺めることになんの感情も抱いてないが、初めは罪悪感に塞ぎこんでた

神様が居なきゃ早々に折れてたか狂ってたろうな

話を戻して俺が一体いくつ野盗の墓を作ってると思うんだ畜生め

結界に関しては俺まで払いかねんしな……

まだ完璧な結界を張れないのならどうするか

そこで考えた俺は、家を囲うように墓を建ててみた

「な、なんという墓地…不気味すぎる…」

「（様変わりしすぎです…）」

「（ある意味異界ですね…）」

焦土にしちゃったこともあり、墓地と化した部分は随分とおどろおどろしい雰囲気を出して森の景観にそぐわない土地になった

これなら肝試しに困らんぞ…金とれるくらいに

だがここまで不気味であれば誰も近寄るまい

作った俺だってちょっと一面の墓地に引いてしまうくらいだ

あ、でも墓荒らしとかは来そうだな

その手の人間にはきっと宝の山に違いない…たぶん

この中心に平気で住み着く俺はなかなかの変人だと思う

「そこのところ神様的にどう思う？」

「「（ロリコン鬼いさん）」」
「いやぁそれほどでも」
「「（ほめてないですよ！）」」

とにかく俺は長々と平穏に快適に末永く暮らせるように増改築計画を練るのだ

……回りが墓地の時点で穏やかに暮らせんのか？とか思っちゃいけない

だって俺だってそこは不安要素なんだもん

うん、正直墓地にした俺が馬鹿だった

さてと…お金とかを稼ぐぶんの狩りをしないとねぇ

いつものように紅い外套を纏い森の中を歩みだした

日も沈み、あまり狩りをしたことのない時間だ

ただ、いつもと違う行動をしたのがいけなかったのか俺にとっては面倒なことが起きるのだった

暫く獲物探しに没頭していた時に何か森の中に複数の気配が動くのを感じた

「獣…じゃあない…人間？また野盗か？」
ちょこちょこ動き回る気配がどうも気になり俺はその気配の現場に足を進める
それについで次第に聞こえ出す人々の怒声
「なんかただならぬ予感が…行ったら巻き込まれそうだよな…」
どうすっかな？と考えたとき確かに俺の耳に入った
殺せとか化け物とか魔女とか吸血鬼とかいろいろ、とにかく口汚い言葉の羅列が次々に風にのって
「あまり穏やかじゃないな…」
気付いたら俺は気配のする方へ歩いていた
遠くより視認できる距離に辿り着くとそこには異様な光景が
鎧を着た騎士達とロープを着た男達が磔を掲げて勝鬨をあげていた
磔にはまだ１０歳かそこらの少女が手足に釘を刺されて

回りには彼女が抵抗したであろう騎士の遺体も見受けられる
綺麗な金の髪は半ばまで血に汚れその顔には涙が溢れていた

「まさか…エヴァンジェリンか？」

そういや６００年前に俺は蘇生している
そうか、時期的には真祖になった彼女に出会える可能性があった
すっかり忘れていた
どうする？原作キャラだぞ？どうせ原作開始まで助かるはずだが…

いやまて、１００年経っているとはいえ実力はまだ原作のエヴァほどじゃないんじゃ？
そう考えるとここで助けないと不味い気がする
何だか雰囲気的にはこのままエヴァは死んでしまいそうだ…
原作には関わらないがその登場人物とは交流してみたいと思っている
だったらここで助けるべきだ
相手がいくら正義を掲げようと命を奪う免罪符になり得ないのだから

なにより！

「合法で幼女と戯れることが出来る！」

「「（この人この状況で何を言い出してるの！？）」」

「大丈夫、真面目に行くさ…」

そうだ

事情も知らないでただ正義の名の下に相手を滅ぼすような奴は俺が滅びを与えてやる

ＳＩＤＥエヴァンジェリン

物量作戦に出た相手に捕らえられるのも時間の問題だった

思えば失策だった

１００年近く同じ町に居て容姿が変わらないのだから

どいつもこいつも勝手に私を悪と決めて命を付け狙う

私が何をしたんだ？世界は化け物にされただけじゃ飽きたらず、何処までも絶望を与えたいらしい

自然と涙が流れた

こんな人生はもうたくさんだ…

そんなときだ

突然、騎士数人が紅い炎のようなものに襲われて森の中に引きずり込まれる

一瞬の出来事に呆然としていると次は数回の爆音が響く

近くにいた魔法使いの体が文字通り吹き飛んだ

なんだ？何が起きている？

次々に騎士や魔法使いが倒れていく

「くそッ！？全員集まれ！結界を…」

魔法使いの一人が言葉を紡ごうとする間もなく紅い剣に貫かれた

剣…？

「な…なんだありゃぁ！？」

「あ、悪魔か！？」

そこには紅い人型のナニカが剣を突き出して佇んでいた

次の瞬間には霧散して消える

既に騎士達は恐慌状態

そんな中森の奥から一人の男が

暗闇の中でも紅く輝く瞳、身体から魔力が噴き出していた

その大きさに戦慄する

「な、なんだお前は！一体いつからそこに！？」

「ふ、答える義理は無し…」

そしてその男の姿はぶれる

魔法使い達が次々に投げ飛ばされ、騎士は身体を互いに突き刺し合い

気付けば男以外全てが地に伏していた

なんて早業

魔力が消え失せ、男はこちらに歩み寄ってきた

ずっと無表情だった男は初めて表情を見せた

「辛かったろう？今、助けるからな」

優しい笑顔だった

それを最後に私は痛みと疲労から意識を落とした

ＳＩＤＥ悠天

エヴァが気絶したのを見て俺は息を吐いた

そして襲い掛かる羞恥心

キャーッ！何が「答える義理は無し」だよ！

凄いキショイ！いや、俺なんだけどまぁ本当に言って恥ずかしいのなんの穴があったら入りたい

俺みたいなのがなんて事を口走ってるんだ

とりあえず騎士と魔法使いの何人かから血をちょいと抜いてエヴァの口に流し込んだ

「本当は口移ししたかったんだが…」

「（やめてください）」

「（ホントに絶対に）」

決してやましい考えはなかったんだ

ほんとだよ！？

だって器とかそんなの無いし…とにかく気合いで血を飲ませた

これで傷などは幾分か治癒するだろう

ん？なんで俺の血を与えないって？

だって六魔のせいで血まで変な色してたもん

流石に飲ませられないぞこれは…なんだよ黒と赤が混じった血って
…何が起きるかわかったもんじゃない

磔から解放したエヴァの身体をお姫様だっこする

今日は狩りはやめておこう

また余計な遺体の山を築いちゃったしな…

とりあえず彼女を助けておくことにしたのだった
これからの日々がどうなるかです山積みの問題が更に増えそうだねぇ

「くそっ…！お姫様抱っこのまま帰宅するのもいいが、おんぶして
温もりを感じるのも…」

「（さっきかっこいいとか思った私が馬鹿でした）」

「（かっこいいとか思っちゃダメだよ…だって変態で馬鹿だもん）」

「ば、罵倒された！？だけどなんなのこの気持ち！？凄くほっこりした！」

「（大変だ！この人マゾに目覚めかけてるっ！）」

決して俺はロリコンじゃないんだよ！信じてくれよ！……無理？（後書き）

続けて３話を投稿します

ちゃんと最後の別れをかわせないってのは辛いもんだ（前書き）

どこどうしたらこんな話になったのか作者ですらわからない３話

ちゃんと最後の別れをかわせないってのは辛いもんだ

ＳＩＤＥ悠天

こんちは！こないだ慟哭スル魂を放てるようになった悠天です！

最近じゃ俺流瞬動で某生物災害のウィルスで超人になったグラサンの人並みに細かく動けれるようになった

エヴァの時は凄い神経使って頑張ってたんだよ…

結局吹っ飛ぶのが怖くて普通の瞬動だったけどな

有頂天になって一人で乱発してたら石に躓いて吹き飛び、墓地に激突したのは記憶に新しい

そして例の一件以来新しい家族ができました

何だかいろんな本とかを読むちっちゃいの

真祖の吸血鬼エヴァンジェリン

出会った頃にゃ既にあの尊大なしゃべり方になっていたな

彼女はチャチャゼロが出来るまで一人で延々と長い時間を生きることになる

そんな寂しい思いを１００年既に過ごしていたんだ

どれだけ心細いか知っているエヴァにこれ以上味会わせるのも酷だろう

「そんなわけでエヴァ！寂しくなったらお兄さんの胸に飛び込んでげふぁ」

「どういうわけで飛び込むんだ！絶対にするか変態！」

今読んでいたはずの本が俺のみぞおちを直撃した

その場に思わずうずくまる

「ぐおぉ…」

「お、おい？オーギ？生きてるか？」

「ふ、ふふふ…真祖パウワーの込められた本の一撃…まさか…これがエヴァの愛ッ！？」

「死ねッ！」

「生きるッ！」

真祖踵落としが脳天目掛けて降り下ろされる
肉体が人外化してきてるとはいえ流石にそれを喰らうのは不味い
うずくまった状態でゴロゴロと転がり回り、身体をバネにして立ち上がる
そして右手を斜め下から全力で掬い上げる！

「！！」

部屋中を駆け巡る突風
そして巻き上がる黒い布
俺の目に写るは一枚の漆黒

「ふっ…黒か…」

「闇の吹雪ッ！」

「嘘だいくらエヴァでも無詠唱で出来るわけがはあ〝あ〝あ〝あ〝ん〝ッ！？」

発動しただと…？ギャグ補正…侮れんッ！

俺に目掛けて襲い来る闇に飲まれながら思う

下着見ただけでそんな怒んなよベイベ…

「「（誰だって怒ります）」」

ですよねー

そんなこんなで二人仲良く生活をしている

遠退く意識の中換算したらエヴァと出会って１００年たっていた…

「きっとあれだ神様が俺の茶目っ気に対しての嫉妬がエヴァに奇跡をもたらしたに違いない」

「何を言ってるんだお前は…」

はぁと溜め息を疲れてしまった

あ、今うなじが見えた

「オーギ、少し話がある」

「ん？なんだ？」

ま、まさか俺への愛の告白か！？いやぁ照れるなぁ

というか１００年もひとつ屋根の下に過ごしていれば恋心のひとつやふたつは芽生えるに違いない

と思っていた時期があったが明らかに俺のは父性な気がする

昔から世話を焼きたがる性分というか姪や甥っ子の世話をしたときから染み付いたもんだ

うん、記憶にはいろんな人に親とか父親とか親父とか突っ込まれた覚えがありすぎてなんとも言えん

無論蘇生したあとにはエヴァにも言われました

そんなことを考えていて話を聞いていなかったので右ストレートを貰いました

なんという鋭さ、その一撃は世界を狙えるぜ

「オーギ、少し旅がしてみたい」

「ほう…旅か…」

「……反対しないのか？」

「は？なんでさ　見聞とかを広めたり見たことのない技術を手に入れたりすることは悪くないだろ？そもそも俺達は老いじゃ死なんし、戦いもよっぽどの事がなきゃ負けもしない　むしろ経験値になる」

「そうか…なら私はあと数年したらここを出るよ」

「そかそか、なら我はこの地に引きこもれり」

「……お前も旅に連れ出すからな？正論言って外出を渋ろうとも連れ出すからな？絶対に連れ出すからな？」

ち、畜生…鬼が、鬼がいやがる…マジもんの鬼だけどな

遠出を俺はあまりしない

行っても俺は近くの村だけだ

そこは人外の人間すらも快く迎え入れてくれた場所でエヴァもそこで魔導書を無事に手にいれることが出来る

敵意ではない感情を向けられることがどれだけ暖かく嬉しかったか
俺は覚えている
エヴァ以外なら野盗か討伐隊ばかりだったからな
あ、なんか俺もエヴァ同様目の敵にされるようになってしまった

魔王とか呼ばれてるみたいだ
全く…俺の中の中二病を目覚めさせる気か奴らは？

そんな彼らは我が家の回りの墓地になりました合掌
そして家は家で何だか気持ちの悪い家になっていった
俺が改造に改造を加えて最初の掘っ立て小屋擬きは、風水とかからみたら気持ちの悪くなるような部屋の間取りになり、屋敷のようなログハウスのような意味不明の代物だ
エヴァに叱られてなんとか中身はマシになったが初見「は？これ家？」状態だ
何処をどうしたら捻れた家になると思う？改造した俺もわからない
エヴァが始めてきたときは墓地だらけに俺の妖気と魔力が霧状になっていた為

「これは絶対に人が住めないお前はあれかここに本当に住んでるのかお前は絶対に馬鹿だ阿呆だ頭にうじが沸いてる非常識もいいとこだよくもこんな異界で生きてこれたな」

と酷評を頂いた

……ちょっとイラっとしたから頬をつねり回してやった

エヴァから見たら狂気が満ち満ちていて魔に属する存在以外が立ち入りでもしたら狂気に当てられて憤死するとのこと

エヴァに言われて回りに何で動物とかが死んでるかやっと分かったよ…何とか工夫して霧は無害にした

閑話休題

そろそろエヴァが言う通り俺も旅せにゃならんかな

正直この世界、悪と断定したものに容赦ないと言うかなんというか普通に強い魔法使いと戦って生き残れる自信が無くなってきた

今でもそこそこ強いと思ってるが魔力量とか気はエヴァに越された

……俺、近衛木乃香よりちょっと下とか言ってたよね神様？

何故越されたんだ？ちなみに出会った当初は俺のほうが強かった筈なのに最近の模擬戦はよく負けるようになってる

俺も鍛練はしてるがまともに魔法が使えてないのが悪いのか？

そりゃ影の倉庫と飛行と念話ぐらいしか使えてないしなぁ

元々の真祖の力に魔法で強化したエヴァの腕力は凄まじかった

大の大人を森の中にポイ捨てだぜ？軽くあしらわれるようになってショックだ

現状ではセクハラしか出来ないのにこれ以上エヴァに強くなられたら俺はエヴァの椅子になりかねん

……それはそれでアリ…か？

いやいやここは俺の沽券に関わりかねん

ということでいい加減魔法マスターしたい

「しゃあないな…俺も行きますよ」

「む？随分と決断が早いな」

「しっかしあれだ…この家を置いていくのもな…」

「……私はこの住まいは正直嫌すぎる…ここは潔く棄ててしまえ」
「いやだ！！ここまで苦楽を共にした家を見棄てるなど俺には出来ん！それに勝手に住まれたらどうすんだ！！」
「魔法使いでも誰も住み着かんと思うぞこんなところ？」
くそう！苦労して建てたこの俺の城を棄ててなるものか！
そして反論できない！悔しい！
「あ」
「？オーギ？」
「ふっふっふ…エヴァよ…俺は今から魔法の勉強を始める…だから旅に出るまで後数年待ってくれ」
「別に構わんが…っておい！オーギ！」
エヴァの静止を振り切り俺は村に駆け出した
きっと今は気持ちの悪い笑みを浮かべてるに違いない
影から纏わりつくように紅の外套を身に付けてルンルン気分で走り続けるのだった

俺の頭のなかにはとんでもない考えが浮かんでいた

家を影の中に押し込む

絶対に無理無謀とも思える挑戦だ

だが俺には大変愛着のある家を持ち運べるのならなんでもやってやる

考えるは形を固定、圧縮し縮小、結界に閉じ込めるものだ

ふむ、出すときは召喚に近いな

その分の陣や構成を創るためには家にある本では足りん

幸い、今日は不思議な行商のおじさんがいるはず

魔導書を購入するだけのお金もちゃんとあるから全然平気

瞬動で一瞬浮いた体を更に虚空瞬動で駆ける

地に着けばまた瞬動と最高速を常に保つ

……今とっさに考えてやってみたが案外出来るもんだな
そして見えてきたはいつもお世話になっている村
しかし俺は踏みとどまりまだ入らなかった

「うっわ…あれはやべぇぞ」

村の中に森で見慣れた異端審問の騎士団が
ただ今回は普通の異端審問の騎士団じゃない…至るところの動きが
洗練されたまさに精鋭
で、よく異端審問に引っ掛からないお抱えの自称偉大な魔法使いの
皆様
完全武装されてまぁ本気で殺しにかかっていやがること
そして一番目を引いたのがそれを指揮する隊長と思われる痩身の青年
優しそうな笑みを浮かべながら村人達と語らう姿は好青年に見える

が、村人は騙せても俺の目を誤魔化せられない
だってヤバイもんあいつ

笑顔の仮面の裏にある狂気が

うん、今日は大人しく帰ろう

すんごい気分が萎えたから今日も普通に鍛練とセクハラと狩りだけしてよう

しかし俺が帰るよりも騎士団はあっさりと帰ってしまった

普通ならもっと滞在しそうなものだが何故帰るんだ？全くもってわからん、偉い人の考えることはホントにわからん

まあ俺には好都合だからさっさと村に入って、いつもの不思議な行商のおじさんから魔導書を買い取った

それにしてもちょっと騎士団が気になる…とりあえず村長に聞いてみるか

で、会いに行くなり青年の様子を見ていた村長は俺を見るやいなや盛大に眉をしかめられた

なんだこのやろう喧嘩売ってんのかこのやろう

「まだ生きていたか変態翁」

「変態魔王めわしになんかようか」

いつものように話し掛けていつものように返される俺達のいつものやり取り

「なんだ変態魔王ってふざけてんのか変態翁」

「ふざけとらんわいボケナスが　人の村の女性に手を出そうとしおって」

「お前こそ自分の村の女性に手を出すなよ…で、さっきの騎士団はなにさ？」

「あやつらは新しい領主様じゃと　随分と気味の悪い眼をしとったわ　後はお主らを完全に狙っとったぞ？後エヴァちゃんをわしに寄越せ」

変態翁は放っておいて…完全マークですかい

こいつはあれだ旅に早く出よう

あんなおっかないのいちいち相手にしてられっか

「変態翁、俺達は旅に出る　もう村には戻らん…そしてエヴァはやらん」

「そうかい…そりゃそうじゃろうな…くたばるんじゃないぞ？エヴァちゃんを傷付けたら許さんからな？」

「言われるまでもないわ」

かわす言葉なんて少ないが奴を見て

「どうせ帰ってくるまで生きてないだろ？旅立つ前にエヴァと一緒に押し掛けてやるから旨い酒でも用意してろ」

こうして俺は村を離れた

あいつは何だかんだで俺達を悠天とエヴァとして見ていてくれていた

村といい、ほんとにいい村長だったよ…

旅に出たらきっと戻らないだろうな

というかどうせありえん長旅になるんだから世話になった連中は皆天国に登ってらぁ

気が早いが墓参りくらいなら行ってやるぜ変態翁

「そうだな…さっさと魔法覚えて旅に出る前に顔ぐらい出しゃあいいか」

俺は早く研究に没頭すべく急いで家路についた

待ってろマイホーム必ず持ち歩けるようにしてやる

研究が終わり、狙い通りの結果になるまで１０年

エヴァと二人で旅立ちの挨拶をしに村長の家に訪れたが村長は逝ってしまった後だった

流行り病だそうだ

挨拶は早くも墓前でするはめになり、俺は生き返って初めて人の死に泣いた

ちゃんと最後の別れをかわせないってのは辛いもんだ（後書き）

なんなのこの話…

こんなの絶対おかしいよ！

１話の時点で匙を投げた人はたぶん正しい判断

ここまで読んだ人はきっと戯れなだけなんだ…面白いはずがない…

始まってしまった以上どうなるかわかりません

しばらくロリコンはエヴァと旅します

最初の旅だけで３、４話…チャチャゼロが加われば更に３、４話増える…のか？

ちなみにエヴァはヒロイン（仮）です

この先にオリジナルを入れるかもしれないので…

それではいつになるかわからない次話にてまた…

突っ込みに魔法は結構危ないから皆は真似するなよッ！？（前書き）

短くなっているのは作者のボキャブラリーが少なすぎるからなんです勘弁してくださいみたいな４話

突っ込みに魔法は結構危ないから皆は真似するなよッ！？

森の一角から火の手が上がり、世界を闇が凍らせた

怒号と叫びが、続いては断末魔が鳴り響く

宙には一人の童女が翼のような黒い外套をたなびかせて見下ろしていた

そんな彼女に向かって矢や色とりどりの光が殺到する

幻想的だが殺意の込められたそれらは命を奪わんと迫るのに彼女はただただ嘲笑う

「――――――」

彼女が何事か呟き腕を振るう

すると闇が凝縮された矢が空を覆い尽くし、光をすべて飲み込む

それを満足気に見ていた童女は体の力を抜いたように重力に任せて落ちていく

森に姿を消した直後、一瞬にして冷気が押し寄せる
回りは瞬く間にすべてを凍らせて、森の中より氷山が盛り上がった
人型の氷像だらけの世界の中に一人、氷山の頂に座す女王、エヴァンジェリンの目の前には一息で地獄絵図を描き出した

「馬鹿共め…自分の実力ぐらい把握してから挑め」

見下す彼女に答えるものは誰一人いない
生きているのは彼女だけなのだから

森の一角から火の手が上がり、世界を闇が焼き払った
怒号と叫びが、続いては悲鳴が鳴り響く
地には一人の青年が翼のような紅い外套をたなびかせて見下していた
そんな彼に向かって咆哮と共に剣や槍を構えた戦士達が体から魔力の輝きを迸らせて立ち向かう
それぞれが誇る必殺の力を持った一撃が命を奪わんと迫るのに彼はなんでもないように眺めていた

「……」

無言のまま佇む彼の体から漏れ出す魔力とも気とも呼べない紅の気が巨大な異形の形へと変わる

異形は右手の魔剣を地面に突き立てた

その衝撃波で戦士達の纏う魔力を吹き飛ばし、突き立てた端から巨大な火柱が戦士達を焼き付くしていく

大地を切り裂くように突き刺した剣を振り上げれば更に紅の炎が生きとし生けるものを塵ひとつ残さず燃やし、魔王悠天以外の生を否定した

「儚き生よ……死こそ我からの手向けなり…」

影に飲まれながら青年は消えていく

残ったのは無人の焦土だけだった

ＳＩＤＥ悠天

「エーヴァたんっお兄さんと水浴びぐぼぁぁっ！！」

「誰がするか変態　　それに鬼いさんか魔王の間違いだろう？」

氷山の頂で足をぷらぷらと投げ出したエヴァを見つけて背後に影のゲートを出して飛びかかったら何故か殴られた

ちょっとミシリと嫌な音がしたから罅いったかも…

俺がいったい何をしたというんだまったく

いやまぁ確信犯だからわかってるけどさ

「なぁオーギ、いい加減この領地を出ないか？刺客やらなんやらしつこすぎて相手にするのも面倒になってきたぞ」

「あぁ…確かになぁ…これで１６回目の襲撃だったな」

確かにエヴァの言う通りうっとうしい

する必要の無い戦いだが、全滅させて行方を知られないようにしないといかんからいい加減人を殺めることに抵抗がなくなってきた

エヴァもきっと今はそんな状態だろうな

「しかしアレだな…お前がそばにいないだけで殲滅に大分時間がかかるな」

「喜んで一日中そばにいてさしあげますがっ！」

「……やっぱ従者が必要だうん」

「キティちゃん冷たいっ！そして物理的にも冷たいっ！」

「その名で呼ぶなっ！まったく…」

突っ込みに氷の射手は普通に痛いぜよエヴァちゃん

しかし従者か…だとするとチャチャゼロがそろそろ生まれるということか

うーん…あの頭ぶっとんだリアル殺戮人形が旅に加わるとなると俺の命の危機が増えそうな予感がするのは何でだろうか？

まぁエヴァに従者がつけば少しは彼女の負担も減るか

いちいち俺が影で前衛の敵を纏めて拉致するのは面倒だしな

……戦闘の負担は減ってもエヴァのいろんな意味での精神的負担が増える気もするんだが…

「じゃあ今日はここらで泊まるか」

「はぁ…私は普通に宿で泊まりたい」

エヴァの言葉に同意したいが、ついこないだ正体バレて村から追い出されたばっかだよ

回りにその村しかないから無理な話なんだよねぇ

と、ちゃっちゃと例のものを影から呼び出すか

俺の影が枝分かれし、目の前を幾何学的な紋様が刻まれた巨大な陣を作り出す

完成した直後ひとりでに陣は赤く発光を始める

「出でよ！我がマイホォォォムッ！」

魔力を叩き込むと禍々しい妖気と魔力が紅い稲光となって迸る

バキバキと何かがひび割れるような音を出しながら陣の中央からそれはせり上がる

「なぁオーギ　前より無駄に演出凝ってるだろお前　前は妖気とかそんなのなかったよな？」

「それっぽく召喚したかったんだよエヴァ　　俺は魔王なんだから」

「「（魔王（笑）の間違いじゃ？）」」

うるさいぞ幼女神ズ、（笑）とかつけるんじゃない

召喚し終えたそれは捻れた城になっていた

これ…元は小さな小屋だったんだぜ…？

ちょっと最近自宅の改造が俺の楽しみのひとつになってしまって、

ふざけていろんなものを足していったら小さな城になってしまった

たまにエヴァと喧嘩したり、俺の六魔の力を受けたせいで城自体が

勝手に魔力と気の混ざった障壁擬きを展開していたりする

なんだかこの城そのものがそのうち命を持つんじゃなかろうか？そ

れってなんというホラー？

「まぁとにかく俺は疲れた…エヴァと一緒に寝る」

「おい待て！なんで一緒に寝ることになってるんだ！」

「それはなエヴァ……お兄さんがエヴァの布団にくるまってクン

カクンカスーハースーハーするからだよぉおぉおぉッ！ヒャッハァ

ーッ！」

家に向かって疾走しようとしたら氷塊が横殴りに俺をぶっ飛ばした
死角から巨大な物体が激突する…テンプレなトラックのことを思い出したぜ

「ぴゃあぁあぁぁッ！！」

呑気に変なことを考えながら奇声を上げて氷山に直撃した
超冷たいですエヴァさんそしてなにこの氷付けにされてるおっさんの顔、マジうけるんですけど

「そろそろあれだうん…お前を葬らないと私に安寧が決して訪れない気がしてきたぞ？」

「ふっふっふっ…ならばお前に葬られる前にたっぷりねっぷり愛でなければならないな…ゆくぞぉエヴァァァッ！我が生涯の愛を受けェ！」

取り敢えずエヴァの唇を奪う勢いで飛びかかってみたが俺もエヴァに凍らされた氷像の一体になったのだった

「さて…どうする？今日はどこに向かって歩く？」

一夜明け、城を閉まいエヴァに向き直る

腕を組んで考えるように目を閉じていたエヴァは

「そうだな…人形を作るための材料がある方に向かいたい　出来るだけ大きな町だ」

「人形？」

「なに、こないだ話した従者さ　人形の従者を作ることにしたのさ」

「従者ならここにッ！ここにすんばらしい従者がいますがッ！？」

「お前はダメだったじゃないか　陣が弾けて契約何て言ってる場合じゃなかったのを忘れたか？」

ああー…そんなことあったな…

俺の妖気って魔力を弾き飛ばしちゃうんだよな…一度エヴァに内緒

で勝手に仮契約しようとした時の出来事だ

突然妖気と魔力が拒絶反応を起こし、陣が吹き飛んで俺に引火したんだったな…引火とか相容れないにも程があるぞ

ちなみに内緒でやろうとしていたことでエヴァに放置された

何てひでぇ幼女なんだ

「それに仮契約をするにしても絶対に変態のお前とはキスはしない…」

「それが本音かっ吸血幼女うわらばっ！」

こ、氷の射手がッ！俺のレバーをぶち抜いたッ！

しゃ、洒落にならん…ぜ…

最近は俺の扱いがひどい気がするよ何故なのですかマイゴッド！

「「（セクハラばかりしてるからじゃありませんか）」」

おっしゃる通りですはい！

そこは大人しく認めざるえないんだぜ

そして感じる複数の人の気配
この感じからしてまたまた襲撃者たちですかそうですか
「……エヴァ」
「わかっているさ　オーギ、頼めるか？」
「了解、朝から正義のお勤めご苦労なこったなホントに」
「行くぞオーギ」
影にドロリと沈んで黙ってエヴァの前から俺は姿を消す
そしていつものように正義の魔法使いの前衛組やらなんやらを強制的に離れた場所に転移させた
突然の出来事に狼狽えるやつらの目前に現れてやる
さてと、おっ始めるとしますかね？
銃と剣を握り、俺は襲いかかるのだった

突っ込みに魔法は結構危ないから皆は真似するなよッ！？（後書き）

おまわりさん、扇悠天という変態はこっちです

きっと現行犯逮捕できるよねこういう変態が実際にいたら

話の流れはチャチャゼロの誕生ですね

長くて3話かな…でも3話書くまできっと放置する

基本この小説はただの気晴らしなのでクオリティは期待せんでください

というか特にこの作品に過度な期待は地雷を踏むからやめてね！サノブとの約束だよ！

ついでにオリキャラでサブヒロインとか出てくる予定

まぁたくさんは出しません

そんなわけでいつになるかわからない次話にてまたお会いしましょう

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9322v/

あ、あれ？どういうことなの…？え？六魔ノ王？

2011年8月28日10時21分発行